

第3回 伊勢湾漁業影響調査委員会 議事要旨

1. 開催日時：平成 27 年 3 月 11 日 13:00～17:00
2. 場 所：TKP ガーデンシティー名古屋新幹線口 カンファレンスホール 8A
3. 審議内容：現地調査結果の報告と重要な漁業生物に関わる情報整理
伊勢湾シミュレーターの計算結果と現地調査結果の比較
4. 委員の発言要旨
 - 現在までの調査結果からも候補地周辺海域は重要魚種にとって非常に重要な海域であることがわかってきた。
 - たとえばマコガレイを例にとれば、生殖腺重量の時間的推移や仔魚の分布から候補地周辺が産卵場の一つであることが見えてきた。今後は直接卵の採取を実施し、確認していく必要がある。
 - キスやマゴチについても現在の標本船調査等から候補地周辺が産卵場である可能性が高くなってきたため、マコガレイと同様な生殖腺指数の分析等、調査を強化してもらいたい。
 - スズキは卵・稚仔調査から、カタクチイワシの調査で明らかになってきた熱塩フロント等の特徴的な海洋構造に依存する植物、動物プランクトンの生産との関係が強いことが推測され、今後の調査もその点に注目して行うべき。
 - 空港島周辺護岸特に西側護岸は多くの重要魚種の産卵場、索餌場、生息場、貧酸素からの逃避場となっていると推測されるので、その生態学的な構造と機能をより明確にすることが極めて重要であり、特に餌となる小型甲殻類、小型魚類等について調査方法も検討し、強化すべき。
 - ノリの調査に関して標本漁家数、頻度、調査範囲が不十分。
 - アマモに関しては分布の推移だけでなく、伊勢湾シミュレーターで検討しているようなアマモの生態学的機能に関する調査も藻場調査をベースに強化すべき。アマモ場は重要魚種であるアユ、ナマコとの関連も重要なのでそれらを把握できる調査手法を検討すべき。

- 観測された動物プランクトン現存量はカタクチイワシ等の浮魚群集の摂餌によりかなり減耗を受けた後の量であり、シミュレーターでも動物プランクトン現存量が今のところ過大に評価されていることから、カタクチイワシ来遊量から生産量を推測したうえで、動物プランクトン摂食量を推測し、それを加味した動物プランクトン量を求めたうえで、環境要素との対比を検討すべき。浮魚対象の漁船漁業の影響評価には重要な知見になる。
- カタクチイワシの計量魚探調査については、将来の影響評価に必要となる水温、塩分、溶存酸素、クロロフィル等との対応を明確にするため、それらの同時観測を実施すべきである。
- シバエビは全国的に見て今や希少生物であり、生物多様性の視点でも整理してほしい。
- アサリ以外の貝類について、その影響をシミュレーションで評価する際、アサリと同様に母貝の分布についての情報が必要である。これら貝類は局所的に濃密な分布をしている場合が多く、漁業者への聞き取りも含め何らか情報収集をする必要がある。
- アサリ浮遊幼生の空間分布を再現するシミュレーションの再現性は非常に高いが、産卵時期、産卵母貝量等の仮定の置き方に問題はないか。知多半島の限られたアサリ現存量の経月変化だけから推測するのはやや乱暴である。伊勢湾各海域の漁獲量と漁獲努力量から同様な経月変化を求めてその代表性を検証すべき。
- フラックスを計算した結果からみると、ピコ・ナノ・小型プランクトンから懸濁物食者へのフラックスが過小ではないかと思われる。既往の実験結果ではもう少し高いはずなので、餌量選択係数等を既往の実験結果と対比し、再検討してほしい。
- アマモの推移は夏場の高水温との関連が指摘されており、水温と面積との対比も検討してほしい。